

## ❖ 学会参加を通じて

医学類5年の中村賢佑と申します。研究室演習の活動の一環として、第112回日本解剖学会関東支部学術集會に参加し、研究発表をしたのでご報告いたします。

本学術集會は、2024年12月1日、日本大学医学部記念講堂（東京都板橋区）で開催されました。大会長の平井宗一先生（日本大学医学部生体構造医学分野）は、基礎医学の柱である解剖学の分野で、形態学研究のみならず分子生物学、イメージング技術など、新たな研究手法の発展により広がりを見せている現状を踏まえ、最新の研究成果と教育に関する幅広い討論の場を提供されました。

プログラムは、8時50分から17時まで、充実した内容で構成されていました。午前中は学生セッション12演題が発表され、高校生から学部生による新鮮な視点からの研究報告が行われました。私たちの研究室からは、4名の学類生が参加し、3人（医学類2名、生物学類1名）が口頭発表しました。広い会場で初めて発表したので、とても緊張しましたが、無事に乗り切ることができました。私も含めて、皆初めての学会参加でしたので、とても勉強になりました。

続いて特別講演では、東京医科大学の伊藤正裕教授が「様々な研究者達による知見の積み重ねが発見を導くー学生時代に出会った1枚の写真ー」と題して講演を行い、医学・生物学研究における継続的な知見の蓄積の重要性を発表されました。スライドには貴重な資料が多数含まれており、興味深く拝見しました。

午後からは若手研究者セッション10演題、一般セッション9演題の発表があり、最新の研究成果が報告されました。発表内容は、肉眼解剖学的研究から分子レベルの解析、画像解析技術を用いた新しいアプローチまで多岐にわたっていました。クラミドモナス鞭毛の微細構造解析や、プロオピオメラノコルチンニューロンの発生メカニズム解明など、最先端の研究成果が報告されました。

本学術集會は参加費が無料となっており、多数の参加者がありました。解剖学分野における最新の研究動向を共有し、世代を超えた研究者間の交流を促進する場として、大変貴重な会だと思いました。質疑応答では活発な討論が行われ、特に学生セッションや若手研究者セッションでは、経験豊富な研究者からの建設的なアドバイスが多く寄せられ、次世代育成の観点からも有意義な場となっていました。会場では一般参加者に軽食が提供され、参加者間の交流を促進する工夫がなされていました。若手研究者

の積極的な参加と質の高い研究発表は、解剖学研究の明るい未来を感じさせました。

平井先生をはじめとして、学会運営に携わった先生方のご尽力に感謝します。また研究指導をしてくださっている解剖学・神経科学研究室の武井陽介先生をはじめスタッフの先生方、学生の皆さんにもこの場をお借りして感謝申し上げます。



## 学会演題

Kenyu Nakamura, Asumi Kubo, Sara Kamiya, Kyoko Kishi, Koki Higuchi, Momo Morikawa, Suguru Iwata, Tetsuya Sasaki, Yosuke Takei. Analysis of the subcellular localization of the ASD risk gene Myosin Id. The 112th Annual Meeting of the Kanto Branch of the Japanese Association of Anatomists. 2024.12.01.

(医学類5年 中村賢佑)

## ❖ 研究を発信すること

始めまして。医学群医学類4年の坂本智佳子と申します。

現在、解剖学・神経科学研究室にて研究を行っております。今回は、初めての学会参加と先導的研究者体験プログラム（ARE）の経験から、得られたこと、感じたことをお伝えできればと思います。

### （1）初めて学会に参加して

2024年12月1日に開催された第112回日本解剖学会関東支部学術集会に参加しました。本学会は、解剖学や神経科学に関する最新の研究成果が発表される場であり、専門家から学生まで、多くの参加者が集まりました。解剖学的な視点から神経や血管の解剖学的初見に関するもの、そして、神経細胞や抗体に関するものなど、ミクロからマクロの視点で人体の構造と機能に関する様々な研究成果が発表されました。

研究を始めたばかりの私にとって、学会はどこか無縁の世界のように感じていました。しかし、実際参加してみると、どの発表も非常に興味深く聞くことができました。他者の発表を聞くことは新たな知見を得られるだけでなく、自分の知識を広げ、自分の研究の立ち位置を改めて考える機会となることを実感しました。日々の研究やセミナーを通して、広範な知識と深い専門知識の両方が必要だと感じていたため、今回の経験を通して学会参加の重要性と意義を深く実感しました。

### （2）先導的研究者体験プログラムに参加して

私は今年度、先導的研究者体験プログラム（以下、ARE）に応募し、初めて研究発表を行いました。AREは、学群1～3年生の研究を大学が支援してくれるプログラムで、1年を通して自分の研究内容を文章、1分間のピッチ、ポスター、スライドでの口頭発表とあらゆる形で発表する機会が与えられています。



私がこの活動を通して、特に感じたのは、発表は自分と向き合う時間でもあるという事です。自分の研究の一番面白い部分はどこなのか、何を一番伝えたいのかを考え、研究の方向性を見直す時間になります。そして、発表を聴いた参加者からの質問や意見を受け、知識や視点の違いに驚きながらも、研究内容をどのように構成すべきか、どのように相手に伝えるかを真剣に考える機会となりました。研究発表は自分の努力の成果を他者に伝える場であると同時に、他者からのフィードバックを受ける場でもあります。自分の研究が他の研究者にどのように受け取られるのかを知ることで、今後の研究に対する方向性やアプローチを見直すきっかけになりました。

この貴重な経験をさせていただいたことに感謝して、これからも研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

学会参加、AREでの活動どちらでもいえることは、自分の興味を探求している人の姿や、コミュニケーションから得られる力はとても大きいという事です。これを読んでいる人の中に、研究をしてみたいという気持ちを少しでも持っている人がいれば、怖がらずに飛び込んでほしいと思います。

（医学類4年 坂本智佳子）

## ❖ 一歩踏み出した先にある世界 — 研究室演習で得た学びと気づき

### "The World Beyond the First Step—Lessons and Insights Gained Through Laboratory Training"

はじめまして、医学類4年の左中彩恵と申します。私は昨年の春から武井陽介教授の解剖学・神経科学研究室で勉強させていただいております。今回は私が研究室演習を通して感じたことを紹介させていただけたらと思います。

「研究」という言葉に難しそう、敷居が高そうと感じる人は多いのではないのでしょうか。私も入学当初より研究に興味を抱いていたものの、自分にはできないのではと怖気づいているうちに2年が経ってしまいました。しかし、M2の解剖実習を通して実際に眼で見て触れる事で得られるものの大きさを実感し、講義や教科書で学ぶだけでなく、実際に自分の眼で観察し手を動かす機会を得たいと考えるよう



になりました。中でも私が関心を持ったのが神経についてです。神経細胞がしかるべき場所に移動し、突起を伸ばし、こんなにも複雑な神経回路を形成するという事実に感動し、その神秘についてもっと深く知りたいと感じました。そして、現在私が所属している解剖学・神経科学研究室の門をたたきました。解剖学・神経科学研究室では統合失調症や自閉スペクトラム症といった精神疾患の病態をミクロなレベルからマクロなレベルまで明らかにすることを目指しており、私は佐々木哲也先生のご指導の下、母体免疫活性化による胎仔の

大脳皮質形成への影響についての研究に参加させていただいております。これまで長期休みや放課後の時間を使って実験を教わり、安定して結果が得られるよう手技の向上に励んできました。マウスを用いたウェットな実験から画像解析といったドライな実験まで幅広い手法が必要となるため初めは戸惑いも大きかったのですが、先生方や先輩方のアドバイスのもと少しずつできる実験の幅も広がってきたと感じています。現在はミクログリアの形態解析等にも取り組んでおります。予想通りに実験が進まない事もありますが、結果や成果に囚われすぎず、試行錯誤を繰り返す時間が取れる点は医学類生の研究室演習の魅力だと感じています。さらに、毎週月曜日の論文紹介セミナーやカンデルの輪読会を通じて新たな知見を得る事も大きな刺激となっています。

私が研究室演習に参加して感じたことは、知識が足りなくても、大きな発見ができなくても、研究は面白いという事です。私は知識も浅く、実験が大きく進んだわけではありません。しかし初めて蛍光顕微鏡でニューロンの層構造を観察したとき、論文についてメンバーと議論し新しい考えを得たとき、確かに心が動く瞬間がありました。研究に敷居を感じる必要はなかったのだとイメージが大きく変化し、あの時一歩を踏み出して良かったと感じています。一朝一夕で何か結果が得られるわけではありませんが、現在講義や教科書で学んでいる内容もこうした地道で小さな実験が積み重なって解明されてきたのだと改めて気づかされ、その重みをひしひしと感じています。



(医学類4年 左中彩恵)